

エッセイ

# たかが川柳されど川柳 (十二)

上野 一彦

私の「ソサエティ五・〇(ご・てん・ぜろ)」

最近「ソサエティ五・〇(ご・てん・ぜろ)」というフレーズをいろいろところで耳にするようになった。日本の政府は、少子高齢化時代に対応し、持続的な経済成長を成し遂げるために、人づくり革命と生産性革命などを声高に叫んでいる。為政者というものはそうした先を見るのも仕事なのだろう。なかでも生産性革命とは、人工知能(AI)などを活用し、莫大な情報を分析(ビッグデータの解析)し、最短時間で最適な結果を得て生産性を劇的に押し上げるイノベーションを実現する。それが「ソサエティ五・〇」の社会だという。

世界では、ものづくり分野を中心に、ネットワークやI

oT (Internet of Things) を活用していく取組が性急に打ち出されている。スマホの普及などもすっかりその片棒を担いでいる。「ソサエティ五・〇」は、政府が提唱するこうした科学技術政策の基本指針のひとつで、五年ごとに改定されている科学技術基本法の第五期(二〇一六年度から二〇二〇年度の範囲)におけるキヤッチフレーズとして登場してきたものだ。歳をとるとやたら新しいものに飛びつきたい気持ちとそうしたものを一切拒絶したい気持ちの間で揺れ動く。

サイバー空間とフィジカル空間(現実社会)を高度に融合させた「超スマート社会」を未来の姿として共有し、その実現に向けた一連の取組を「ソサエティ五・〇」と称し、

更に深化させつつ強力に推進させようとする魂胆丸見えてある。お題目としては結構なのだが、「超スマート」などと先走られると、すっかりスマートさからは見放されつつある身としてはかえってザラリとした感触が先立つ。日常的に自分自身がバージョンアップにアップアップしている現状では、一方的に新しさだけを謳う変革にはどうしても批判的にならざるを得ない。ましてや教育界でもタブレットやiPadを使えば勉強嫌いが無くなるといわんばかりの超短絡的主張には心底うんざりする。

私自身バージョンアップできません

教えることを生業としてきた私としては、AIを利用した「自動授業」の可能性などという夢物語はむしろ荒唐無稽でさえある。一〇〇歩譲って、新しい技術革新を現実のものとし、リスペクトしつつ受け入れるとしても、しっかりと自分の中で消化して理解したいと思う。若いころから少々へそ曲がり気味の私としては、本物の教養とは「既存の理念をいったん疑いの眼で見ながら咀嚼すべき」と骨の髄までしみこませてきた心根を忘れたくない。そこで私風の「ソサエティ五・〇」を考えてみた。

かつて一九八〇年代だったと思うが、アメリカの未来学

者アルビン・トフラーが『第三の波』(The Third Wave)という著書の中で述べた概念定義にこれをあてはめてみた。トフラーは、人類はこれまで大変革の波を二度経験してきたという。第一の波は農業革命(一八世紀の農業における変革でなく、人類が初めて農耕を開始した新石器革命に該当)、第二の波は産業革命と呼ばれるものであり、これから第三の波として情報革命による脱産業社会(情報化社会)が押し寄せると唱えた。今まさにその第三の波のただなかにあることを実感するにつけ、未来学とはこうしたものかとその比喩に感心した。さすれば私風の「ソサエティ五・〇」は、「狩猟」社会を「一・〇」としてカウントし、トフラーの「農耕」「工業」「情報」の三つの波を超えた、第五番目の新たな社会を示唆するものとなる。私の生業であった教育という世界での次なる「ソサエティ五・〇」は、単なる産業や情報社会の円熟の延長上で考えるとしてもその核をなすものは何か、そうした捉え方を今してみたい。

確かにAIは、世界のそしてプロの将棋や囲碁の世界にまで進出し、ついには手塚治虫的な「人間とロボット」の在り方を蒸し返すものもある。しかし人間とロボットはどちらが優れているか? といった古典的な問いではなく、人間が今までしていた仕事、あるいはそれ以上の仕事を、

何らかの形で機械やコンピュータが代わりに行き、共存する社会の在り方の本質が問われる。そうした未来社会の中では徹底的に、人間とは何をもって人間といえるのかが見つめ直される。私は人間の不完全さを大いに認め、愛するものである。その上で、両者の在り方を突き詰めていくと、最終的には「個への回帰」「個への尊重」という命題にたどりついていく。それは単なる復古やペンジュラムではない。これまでの様々な改革、改善の上に、更なる個への回帰、新しい個の尊重を意味する時代の到達を願う切なる祈りに似た気持ちである。

日本の教育界では、「一斉授業」こそ、世界に冠たる教育システムと自負する人々も多い。たしかに通常の教育では、公的な指導要領を信奉し、そうした教育形態によって最大の効果を挙げてきたといえる主張もあながち否定はできない。しかし、私の主戦場である特別支援教育においても、この流儀で最後まで個のニーズを支援しようとしたがるのは悪い癖なのではないだろうかと常々感じてきた。言い換えると、グループの指導も場面によって必要だが、なんでも学級を単位に、画一的に運営したがるのは通常教育で勝ち得た栄光をそのまま特別支援教育にも持ち込もうとする強引さを感じる。それが単純な平均的成果主義を生み、どこかで個の存在を矮小化してしまう。

残され感のある昭和世代はそんなことをしみじみ思う日々である。

### われ平目深き底から空見上げ

#### 寿命あれこれ

織田信長の「人間五〇年下天の内をくらぶれば夢幻の如くなり」の言葉もさることながら、己が人生を振り返るとき「寿命」という二文字に思いをはせることがよくある。後期高齢者というありがたいカテゴリーをいただいた今、「平均寿命」はその考えの入り口となる。平和な時代が続くと平均寿命は延びるそう。今日、日本人女性の平均寿命は八七歳、男性は八一歳といわれる。平均余命という言葉もあり、各年齢の人がこれから生きられる平均年齢のことで、生まれたばかりの〇歳児の平均余命を平均寿命とすれば、昨年亡くなった同輩、樹木希林と同じ見事な後期高齢者である七五歳のわが平均余命はあと何歳ぐらいなのか気になる。

#### 別居婚奇妙絶妙樹木希林

ただ生きていくだけでは意味がない、「健康上の問題

合衆国議会で一九七五年に制定された「全障害児教育法」は、一九九七年「障害者教育法（IDEA）」と名を変え、今日、世界のインクルージョン教育のモデルとなっており、その屋台骨は「個別教育計画（IEP）」に基づいている。わが国でも「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」に異を唱える人はどこにもいない。問題なのはその個への効果であり、そのための実効性のある運営形態なのだ。個に関する様々な情報をビッグデータとして解析し、理想の支援プログラムが作成できたとしても、その仏に魂を入れるのは「個別の」を活かすための個をベースにした柔軟な運営形態ではないだろうか。常々、「支援やサービスは利用しやすく、その上で効果が実証されなければならぬ」と言い続けてきた。

新しい社会が本当に一人一人の人間を大切にすることをめざすのなら、今一度、個に立ち返り、まさに「No child left behind（たった一人の子供も落ちこぼさない）」の精神を取り戻さなくてはならないと思う。AIもそのためのひとつのツールでしかないと思う。これが「個への回帰」であり「個の尊重」につながる。

二〇二五年には大阪での二度目の万博も決定し、二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックにつき、また長生きの目標ができた感もある昨今、新元号の発布を目前に取り

で日常生活が制限されることなく生活できる期間」である「健康寿命」こそが大切という意見もある。調べてみれば、現在の日本人の健康寿命は、女性が七四歳、男性が平均七十一歳とされており、平均寿命との差、女性で一三年、男性で一〇年が他者の支援を必要とする期間であり、この期間を少しでも短くするために、「健康寿命を延ばそう」という機運が高まっているそう。もちろん健康寿命を延ばすことは、それぞれの高齢期の充実という意味でも、社会保障費の低減からも大切なのだが、その平均健康寿命が尽きているわが身としては著しい違和感を覚える。

よくよく調べてみれば、健康寿命は「要介護状態になつてしまう平均的な年齢」、つまり、要介護認定を初めて受けた年齢を平均した数値ではなく、国民生活基礎調査において、「あなたは現在、健康上の問題で日常生活に何か影響がありますか」「あなたの現在の健康状態はいかがですか」という質問を行って、「日常生活に制限のない期間の平均」「自分が健康であると自覚している期間の平均」を算出し、年代別人口や生存率などを加味して導いた数値だそう。だとすれば、要介護認定といった客観的な基準ではなく、アンケートに回答した人たちの主観に基づく数値だから、かなりあいまいで、甘い定義と言わざるを得ない。還暦を迎えたとき、この先厄年からも見放されているこ

とをあらためて知ったが、先のことなどよくよくよせず、毎日感謝して生きていけばよいのかも知れない。人生を振り返り、子育てが終わり、子供たちが巣立っていった時が実質的な家族の終焉、いわば「家族寿命」の尽きたときというべきか。「家族寿命」など聞いたこともないが、それなりに意味はある。

さすれば「夫婦寿命」という言葉も頭に浮かぶ。夫婦が夫婦として共に過ごす時間、それを寿命に準える。離婚も一緒の夫婦寿命の終わりを意味するが、私が言いたいのは、老齢期、つまり家族寿命が尽き、定年退職を迎え、夫婦二人で最後の人生を謳歌する時間、それこそ最後のゴールデンタイムという意味で「夫婦寿命」と名付けてみた。どちらかが病に倒れば、夫婦寿命は健康寿命の終わりとともに介護的な意味が加わるので質の転換を迎える。

健康のうちに夫婦が夫婦として最後の充実した時を共有する、それが夫婦寿命である。なにごとともそうだが意外と長そうに見えてそうでない気がする。恐らくそう意識して数年、長くても一〇年は持つまい。夫婦寿命を意識し始めてから忙しくなった。今、足腰の立つうちに、二人で旅行をしようがわが家の合言葉である。健康な夫婦寿命は意外と短い。そんな気のする今日この頃である。

#### 小旅行これが最後と積み重ね

#### 隆郎君を送る

大学時代の親しい後輩だった。テニスや麻雀もよくした。健康で、スマートで、病魔などとは無縁の、誰よりも長生きしそうなナイスガイだった。大学院も一緒で、女子大から大学院に進学してきた女性と結ばれた。奇しくも彼女は私の仕事の上での大切なコワーカとなり、そのご縁で川柳同人の仲間としてのお付き合いもある。いつの間にか彼のほうは、私にとっては彼女の旦那さんという、いささか遠い位置づけになっていた。

一〇月頃だったと思うが、彼から数年間の仕事をまとめた著書（そこには何かあるー「この自分」があるという不思議ー春風社刊）が突然送られてきた。本は専門書ではあったが彼らしいやや軽いタッチで書かれたものだった。ちゃんと読んでから札状を書こうと思いついた。あんなに読むと読むと読み終った頃に、友人から突然、彼の訃報を聞いた。不覚にも彼がそんな重病の床にあるとは全く知らなかった。

八月までテニスをしていたが急に食欲がなくなり体になにか異変を感じ、医者に見せたところ進行性癌でステージⅣ、すぐに入院、それからたった三カ月で帰らぬ人となった。

巡かすると惰性になりいつの間にかカビが生えるなんて。

#### 人恋しその温もりと添い寝する

◇ 誰しも人は恋しくなる。傍にいなければその思い出を温もりとして添い寝するなんて女々しすぎるかな。

#### 旅行より旅の二文字が僕は好き

◇ 旅行と旅は違う。このニュアンスの違い。旅には郷愁がつきまとい、それはかすかな胸の痛みを伴う。年寄りの勝手な思いか。

#### 題詠「許す」

#### 世が世なら空手チョップを見舞いたい

◇ われら昭和世代はTVの登場とプロレス中継によって新時代を迎えた。なかでも力道山の悪役をなぎ倒す空手チョップほど胸のすくものはなかった。このご時世、空手チョップを見舞いたい輩が多すぎる。

#### 嫌なことすぐに忘れるお人好し

◇ 人の良さってそういうこと。執念深く根に持つんなら江戸っ子の風上にも置けねえなんて、バカ丸出しですね。

#### あのひとの許してあげるにジ・エンド

◇ なんやかんやあってもあのひとの「許してあげる」の一言ですべては氷解、そしてハッピーなジ・エンドとなるのです。

#### 亡き人と逢魔が時に待ち合わせ

合掌

#### たかが川柳 されど川柳 (平成三〇年下半期)

(川柳同人「多年草」(毎月)、川柳同人「だんだん」(隔月)に発表した拙句です。)

七月

だんだん(六〇号)

しつとりと秘める仲にも儼が生え

◇ 人生にも梅雨の季節つてあるのかな。春の兆し、激しい恋の夏、秋風が立ち、厳しい冬を超え、めぐる季節も何

多年草(一〇七号)

**巡礼の旅こそ似合う安倍夫妻**

◇小選挙区制の仕組みのスキをついての安倍一強。やりたいたく放題したい放題。民主主義もへったくれもない右傾化。夫唱婦随だからなおいけない。お二人で巡礼の旅にでもでたらどうですかね。

**終わった人言われたくない子供から**

◇映画「終わった人」サラリーマンの末路の悲哀が滲み出た映画なんですが見えない人にはわからないね。

**ボルダリング君の先祖はテナガザル**

◇東京オリンピック期待のボルダリング。あの手指の強さ、身のこなしを見ていると人類の祖先是間違いなく猿、それもテナガザルに違いないと思う。

題詠「平」

**平成は平和のうちに暮閉じる**

◇昭和は何といつても戦争体験が背骨になっている。平成は災害は多かったけれど、日本は戦争には巻き込まれなかった。この幸せな時代感、昭和世代だけかな。

**ゲームでも戦闘ばかり平和呆け**

◇子供の世界はゲームばかり。それにしても戦闘ものばかり。平和すぎるとそんな刺激を求めるものなのか。政府の右翼化もちよつと心配。

**わが人生平らな道を選び過ぎ**

◇安易な選択ばかりではなかったが、ムリムラムダを避けると。結局は平たんな道ばかり歩むことになる。せめてきつちり区切りだけはつけたいものです。

八月

多年草(一〇八号)

**暴力団終身会長KOや**

◇口を開く度に物議となる発言。アマボクシング界の悲劇を喜劇化してしまう裸の王様。黒い社会とのつながりについて辞任。おおよそ終身会長など平気で名乗る感覚の異常さは格好のTVネタだった。

**付度を勝手にしたとシラを切る**

◇勝手に付度しただけで何の罪もないと逃げきる政治家。付度させる土壤を作った道義的責任を感じない厚顔ぶりにあきれるばかり。

**安倍一強それを支えるダメ野党**

◇自浄機能を失った政治を支えているのは四分五裂した魅力無い野党にも大きな責任がある。一体この国はどこに行くのだろう。

題詠「戻る」

**振り出しに戻るがあれば今一度**

◇双六にある「振り出しに戻る」が人生にもあるなら、もう一度最初からやり直すかどうか。まあ何度やってもこんなもんじゃないのかな。

**鮭ですよ子供はいつか故郷へ**

◇四年ごとに生まれた川に戻ってくる鮭。故郷を離れた子供たちもきつといつかまた戻ってくる。故郷のない都会っ子にはそんな夢をみることもできない。

**初恋へタイムマシンに乗ってみる**

◇若いふたりが初めて心を通わせるそうした瞬間の映像が好きだ。タイムマシンがあるならばもう一度そんな経験をしてみたい。せめて夢の中だけでも。

九月

だんだん(六一号)

**友見舞い明日はわが身と背をさす**

◇同世代の訃報をよく目にするようになった。あんなに元気だった友が入院。見舞いに行きその姿に思わず自分を重ねてしまう。

**あの時に前後の不覚なかったら**

◇あの日あの時、酔いに任せたあの前後不覚のあの思い出。そんなことどもが妙に懐かしく思い出される。きつと繰り返しても同じなんですしょうね。

**壊れゆく脳のもろさよ砂糖菓子**

◇情けないほど人の名前、本の名前など思い出せない。歳とあきらめてしまえばそれまでだが、まるで脳が音を立てて壊れていくかのよう。そのもろさまるで砂糖菓子。

八月

多年草(一一九号)

**風雪に耐えてだんだん丸くなる**

◇人生の厳しい風雪。それをくぐり抜けてくるうちにいつの間にか人間も角が取れ丸くなっていく。

**嵐なら通り過ぎるをじっと待つ**

◇今年は何と台風の多い年か。やがて過ぎ去ることことがわかつてるので慌て騒がずじっと待つ。同じことは人生の波風もまた同じ。

**風化するあの恋心嫉妬心**

◇恋に燃え、嫉妬に身を焦がす。そんな日々も遠い昔。思い出もだんだん風化していく。これぞ静かな老境。

題詠「戻る」

**一強におこぼれ求め人群れる**

◇安倍一強。そんな情勢の中、強いものに媚び、諂う輩が多すぎる。なかでもあさましいのはおこぼれも期待して追従する輩。どっちもどっち。

◇怖いもの地震地滑り火事家内

◇全国を襲う地震と大雨、そして地滑り。昔なら地震・雷・火事・おやじだったが現代ならこうなるのかな。

**優しさに厳しさを包む母の愛**

◇母の愛はただ優しいのではない。その中核には人として立派に育って欲しいという厳しさがある。だからこそ母は尊いのです。

題詠「まだ」

**残る夢果たし切るにはあと百年**

◇まだまだ死ねない、やることが山のようにあると友は言う。そんな欲張りな友人を見てそれらをすべて成し遂げるには後一〇〇年かかりそうとさえ思う。しかしそれこそ生きる力かもしれない。

「もう」と「まだ」間で揺れる老年期

◇よくある句想。ちやうど自分の歳を「もう」と「まだ」で表現したくなる。まさにそのど真ん中にいる。

**まだ若い言ったとたんに嘘つまりずく**

◇まだまだ若いと言いつつ途端に嘘つまりずくことがある。それなりに老いを認めながら生きていきたい。

一〇月

多年草(一一〇号)

**別居婚奇妙絶妙樹木希林**

◇昭和一八年生まれの女優樹木希林(きききりん)が亡

くなった。存在感のある女優であった。ロッカー内田裕也が夫だったが不思議な夫婦でもあった。樹木希林に捧げる一句である。

**よい子にと無理した果ての不登校**

◇聞き分けの良い子が突然、不登校になる。だれでもどこにでも生ずるのだが、どうも過干渉による二次障害のような気もする。

**親方は一人相撲で肩すかし**

◇好きだった名横綱貴乃花があつという間に相撲協会から消えてしまった。おまけに離婚。ベルリンの壁ほどではないが何かが崩壊していく様をみた。

題詠「階段」

**何事も上りは辛い下りは恐い**

◇事故はいつも下り。確かに登りはつらいが、下りこそ注意が肝心。階段の下りではいつも手すりを頼りにする。これこそ老いの知恵である。

**下りほど手すりみがくは老いの知恵**

◇前句の続きで、手すり磨きは日常。それは恥ずかしいことではなく、むしろ自然に身に着いた防衛反応なのです。

**急階段これも人生一歩づつ**

◇急坂急階段を上るとき、何も考えずただひたすら一歩づ

つ踏みしめます。家康の教訓「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし」を思い出しつつ。

一二月

だんだん(六二号)

**支持率が天の声にはならぬ国**

◇付度だか改ざんだか、あとは幼稚な数だけの民主主義だとすれば民意を表すには支持率だけ。ところがなぜかそれが反映しない。ここにも付度と改ざんがあるのかもしれない。

**宿帳にあわて騒がず妻と書く**

◇成りすましの極み。妄想たくましくして、こんな句を讀んで悦に入っている。誤解、それも妻にされたらどうしよう。

**ていねいに痛という字を書いてみる**

◇生まれて初めての宣告。幸い検査の結果良性ではあったがその間いろいろのことを考えた。そんな時に自然に生まれた一句。

題詠「ひやり」

**元カノも呼ばれていたよ披露宴**

◇昔に比べるとこんな機会は減ったが、かすかな記憶をたどればこんなニアミスもあったような。

**セクハラも時代変われば意味変わる**

◇人間の信頼関係が薄れてきた昨今、セクハラ、パワハラの大合唱。時代の変化としか思えません。昔がよかったわけではないが、人が人を信じられなくなったからなのかと思わざるを得ません。

**アクセルとブレーキいつか仲よしに**

◇高齢者の運転は危ない。自分自身自覚します。アクセルとブレーキの踏み間違えが多いのですが自分でもますます自信がなくなります。

多年草(一一一号)

**運転は紅葉じゃなくて落葉です**

◇若葉からやがて紅葉に。運転マークはそうですが、実際には落葉マークのひとつもいそう。危ない危ない。

**在庫処理やはり中味は粗悪品**

◇小選挙区制の結果、数の上での圧倒的差。そしてやりたい放題。ただ回数だけの在庫整理内閣。案の定、粗悪品の露呈。こんなご時世どうしたらいいのでしょうか。

**木枯らしが喪中の知らせ背負ってくる**

◇一二月、喪中の知らせが木枯らしとともに届きます。加齢とともに寒さが身に浸みます。

題詠「波」

人生をサーフィンするが乗り切れず

◇ バランス競技はどうも苦手。気持ちよさそうにサーフィンする映像を見ながら、人生の荒波もあまり上手には乗りこなしてこなかったなと自戒。

人波に消えていったは若き俺

◇ デジャブじゃないのですが、都会の人ごみの中に若い時の自分をふと見覚えることがありますか。何気ないこの句、師匠である晃彦さんから褒めてもらった。

波風を立てずに過ごす夫婦術

◇ 歳と共に穏やかな時間が増えていく。術というほどのものではなくそれが加齢というものなかもしれませぬ。

一二月

多年草(一一二号)

サンタ宛て孫の願いをメールする

◇ 孫はジイジがサンタさんのお友達だと信じている。孫からのサンタさん宛のお願いをメールするのが私の役目。いったいいつになったらサンタさんがジイジだとわかってしまうのだろう。

お元気ですかたった一行添えるだけ

◇ 年々年賀状書きが億劫にもなり、それでも何か一言とは思いますが、たった一行添えるだけのことが多い。かといっ

て、賀状は今年限りとする挨拶もできないでいる。

煩惱が減ってきました百七つ

◇ 除夜の鐘も煩惱の数の一〇八つとか。歳と共に少しづつ大人に、いや次第に煩惱から解放されつつあることは間違いないのだが、実はほんの少しだけ。それが一〇七つ。この微妙な違い分かってもらえたらうれしい。

題詠「学ぶ」

遊びこそ学びの母とひとり言

◇ 学びは真似ぶとか。よく学びよく遊ぶとはいいいながら、やっぱり遊びは遊び。ここまで居直れたら最高と思いつつの一句。

スマホ替え子どもに払う授業料

◇ スマホの進化はすばらしい。ただ便利な機能程自分一人ではどうにもならない。結局、若いものに頼ることになる。それが授業料というわけ。

生き方を背中で教え父は逝く

◇ 好きであろうと嫌いであろうと、結局親は親。どこか似てくるものなのだが、やはり背中を見て育つというか、その背中から学んでいる自分を感じる。それはわが子について同じなのだろうか。

(了)